

大きなかに

小川未明

青空文庫

それは、春の遅い、雪の深い北国の話であります。ある日のこと太郎は、おじさんの帰ってくるのを待っていました。

おじさんは三里ばかり隔たった、海岸の村へ用事があつて、その日の朝早く家を出ていったのでした。

「おじいさん、いつ帰ってくるの？」と、太郎は、そのとき聞きました。

すつかり仕度をして、これから出てゆこうとしたおじいさんは、にっこり笑つて、太郎の方を振り向きながら、

「じきに帰ってくるぞ。晩までには帰ってくる……。」といいました。

「なにか、帰りにおみやげを買ってきてね。」と、少年は頼んだのであります。

「買ってきても、おとなしくして待つていろよ。」と、おじいさんはいいました。

やがておじいさんは、雪を踏んで出ていったのです。その日は、曇つた、うす暗い日でありました。太郎は、いまごろ、おじいさんは、どこを歩いていられるだろうと、さびしい、そして、雪で真っ白な、広い野原の景色などを想像していたのです。

そのうちに、時間はだんだんたつてゆきました。外には、風の音が聞こえました。雪が

霰あられが降ふつてきそうに、日ひの光ひかりも当あたらずに、寒さむうございました。

「こんなに天気てんきが悪いわるから、おじいさんは、お泊とまりなさるだろう。」と、家うちの人ひとたちはいつていました。

太郎たろうは、おじいさんが、晩ばんまでには、帰かえつてくるといわれたから、きつと帰かえつてこられるだろうと堅かたく信しんじていました。それで、どんなものをおみやげに買かつてきてくださるだろうと考かんえていました。

そのうちに、日ひが暮くれかかりました。けれど、おじいさんは帰かえつてきませんでした。もうあちらの野原のほらを歩あるいてきなさる時分じぶんだろうと思おもつて、太郎たろうは、戸口とぐちまで出でて、そこにしばらく立たつて、遠とおくの方ほうを見みていましたけれど、それらしい人影ひとかげも見みえませんでした。

「おじいさんは、どうなさつたのだろう？ きつねにでもつれられて、どこへかゆきなされたのではないかしらん？」

太郎たろうは、いろいろと考かんえて、独ひとりで、心配しんぱいをしていました。

「きつと、天気てんきが悪いわるから、途とちゆう中ちゆうで降ふられては困こまると思おもつて、今夜こんやはお泊とまりなさつたにちがいない。」と、家うちの人ひとたちは語かたり合あつて、あまり心配しんぱいをいたしませんでした。

しかし太郎たろうは、どうしても、おじいさんが、今晩こんやと泊とまつてこられるとは信しんじませんでした。

た。

「きつと、おじいさんは、帰かえつてきなさる。それまで自分じぶんは起おきて待まっているのだ。」と、心こころにきめて、暗くらくなつてしまつてからも、その夜よにかぎつて、太郎たろうは、床とこの中なかへ入はいつて眠ねむろうとはせずに、いつまでも、ランプの下したにすわつて起おきていたのでした。

いつもなら、太郎たろうは日ひが暮くれるとじきに眠ねむるのでしたが、不思議ふしぎに目めがさえていて、ちつとも眠ねむくはありませんでした。そして、こんなに暗くらくなつて、おじいさんはさぞ路みちがわからなくて困こまつていなさるだろうと、広ひろい野原のほらの中で、とぼとぼとしていられるおじいさんの姿すがたを、いろいろに想そう像ぞうしたのでした。

「さあ、お休やすみ、おじいさんがお帰かえりになつたら、きつとおまえを起おこしてあげるから、床とこの中なかへ入はいつて、寝ねていて待まつておいで。」と、お母かあさんがいわれたので、太郎たろうは、ついにその気きになつて、自分じぶんの床とこにはいつたのでありました。

しかし、太郎たろうは、すぐには眠ねむることができませんでした。外そとの暗くらい空そらを、吹ふいている風かぜの音おとが聞きこえました。ランプの下したにすわつておるときも聞きこえた、遠とおい、遠とおい、北きたの沖おきの方ほうである海うみの鳴なる音おとが、まくらに頭あたまをつけると、いつそうはつきりと雪ゆきの野原のほらの上うへを転ころげてくるように思おもわれたのであります。

しかし、太郎は、いつのまにか、うとうととして眠ったのであります。

彼は、朝起きると、入り口に、大きな白い羽の、汚れてねずみ色になった、いままでにこんな大きな鳥を見たこともない、鳥の死んだのが、壁板にかかっているのを見てびっくりしました。

「これはなに？」と、太郎は、目を丸くして問いました。

「これかい、これは海鳥だ。昨夜、おじいさんが、この鳥に乗って帰ってきたのだ。」と、お母さんはいわれました。

おじいさんが帰ってきたと聞いて、太郎は大喜びでありました。さつそく、おじいさんのへやへいつてみますと、おじいさんは、にこにここと笑って、たばこをすっていられました。

それよりも、太郎は、どうして、海鳥が死んだのか、聞きたかったのです。その不審が心にありながら、それをいい出す前に、おじいさんの帰ってきたのがうれしくて、「おじいさん、いつ帰ってきたの？」と問いました。

「昨夜、帰ってきたのだ。」と、おじいさんは、やはり笑いながら答えました。

「なぜ、僕を起こしてくれなかったのだい。」と、太郎は、不平に思つて聞きました。

「おまえを起こしたけれど、起きなかったのだ。」と、おじいさんはいいました。

「うそだ。」と、太郎は、大きな声をたてた。

すると、同時に、夢はさめて、太郎は、床の中に寝ているのでした。

おじいさんは、お帰りなされたらうか？ どうなされたらうか？ と、太郎は、目を開け

ておじいさんのへやの方を見ますと、まだ帰られないもののように、しんとしていました。

太郎は、小便に起きました。そして、戸を開けて外を見ますと、いつのまにか、空

はよく晴れていました。月はなかつたけれど、星影が降るように、きらきらと光つてい

ました。太郎は、もしや、おじいさんが、この真夜中に雪道を迷って、あちらの広野を

うろついていなさるのではなからうかと心配しました。そして、わざわざ入り口のとこ

ろまで出て、あちらを見たのであります。

いろいろの木立が、黙つて、星晴れのした空の下に、黒く立っていました。そして、だ

れが点したもののか、幾百本となく、ろうそくに火をつけて、あちらの真つ白な、さびしい

野原の上に、一面に立ててあるのです。

太郎は、きつねの嫁入りのはなしを聞いていました。いまあちらの野原で、その宴会

が開かれていますのでないかと思ひました。もし、そうだったら、おじいさんは、きつねに

だまされて、どこへかいつてしまいなされたのだろうと思つて、太郎は、熱心に、あちらこちらの野原の方を見やつていました。

ろうそくの火は、赤い、小さな烏帽子のように、いくつもいくつも点つていたけれど、風に吹かれて、べつに揺らぎもしませんでした。

太郎は、気味悪くなつてきて、戸を閉めて内へ入ると、床の中にもぐり込んでしまいました。

ふと太郎は、目をさますと、だれかトントンと家の戸をたたいています。風の音ではありません。だれか、たしかに戸をたたいているのです。

「おじいさんが、帰つてきなすつたのだろう。」と、太郎は思いましたが、また、先刻、野原に赤いろうそくの火がたくさん点つていたことを思い出して、もしやなにか、きつねか悪魔がやつてきて、戸をたたくのではなからうかと、息をはずませて黙っていました。すると、この音をききつけたのは、自分一人でなかつたとみえて、お父さんか、お母さんか、おんが起きなされたようすがしました。

ランプの火はうす暗く、家の中を照らしました。まだ、夜は明けなかつたのです。しかし、真夜中を過ぎていたことだけは、たしかでした。

そのうちに、表の雨戸の開く音がすると、

「まあ、どうして、いま時分、お帰りなさいったのですか？」と、お父さんがいつていなさる声か聞こえました。つづいて、なにやらいつていなさるおじいさんの声か聞こえました。「おじいさんだ。おじいさんが帰ってきなさいったのだ。」と、太郎はさっそく、着物を着ると、みんなの話している茶の間から入り口の方へやってきました。

おじいさんは、朝家を出たときの仕度と同じようすをして、しかも背中に、赤い大きなかきを背負っていられました。

「おじいさん、そのかにどうしたの？」と、太郎は、喜んで、しきりに返事をせきたてました。

「まあ、静かにしているのだ。」と、お父さんは、太郎をしかって、

「どうして、いまごろお帰りなさいったのです。」と、おじいさんに聞いていられました。

「どうしたって、もう、そんなに寒くはない。なんといつても季節だ。早く出たのだが、道をまちがったのう。」と、おじいさんは、とぼとぼとした足つきで、内に入ると、仕度を解かれました。

「道をまちがったって、もうじき夜が明けますよ、この夜中、どこをお歩きなさいったので

すか？」

父も、母も、みんなが、あきれた顔つきをしておじいさんをながめていました。太郎は、心の中で、おじいさんは、自分の思ったとおり、きつねにだまされたのだと思います。

やがてみんなは、茶の間にきて、ランプの下にすわりました。すると、おじいさんはつぎのように、今日のことを物語られたのであります。

「私は、早く家へ帰ろうと思つて、あちらを出かけたが、日が短いもので、途中で日が暮れてしまった。困つたことだと思つて、独りどぼとぼと歩いてくると、星晴れのしたい夜の景色で、なんといつても、もう春がじきだと思ひながら歩いていた。海辺までくると、雪も少なく、沖の方を見れば、もう入り日の名残も消えてしまつて、暗いうちに波の打つ音が、ド、ド、と鳴つているばかりであつた。ちようど、そのとき、あちらに人間が五、六人、雪の上に火を焚いて、なにやら話をしてるようだった。

私は、いまごろ、なにをしているのだろう、きつと魚が捕れたのにちがいない。家へみやげに買つていこうと思つて、なんの気なしに、その人たちのいるそばまでいつてみると、その人たちは酒を飲んでいた。みんなは、毎日、潮風にさらされるとみえて、顔の色が、火に映つて、赤黒かつた。そして、その人たちの話していることは、すこしも

わからなかったが、私がゆくと、みんなは、私に、酒をすすめた。つい私は、二、三杯飲んだ。酒の酔いがまわると、じつにいい気持ちになった。このぶんなら、夜じゆう歩いてもだいじょうぶだというような元気が起こった。

私は、なにかみやげにする魚はないかというとき、その中の一人の男が、このかを出してくれた。

金を払おうといつても手を振って、その男はどうしても金を受け取らなかった。私は、大がにを背中にしよった。そして、みんなと別れて、一人で、あちらにぶらり、こちらにぶらり、千鳥足になって、広い野原を、星明かりで歩いてきたのだ。」と、おじいさんは話しました。

みんなは、不思議なことがあったものだと思います。

「よく星明かりで、雪道がわかりましたね。」と、太郎のお父さんはいつて、びつくりしていました。

「おじいさん、きつときつねにばかされたのでしょうか。野原の中に、いくつもろうそくがついていかなかったかい？」と、太郎は、おじいさんに向かっていいました。

「ろうそく？ そんなものは知らないが、思ったより明るかった。」と、おじいさんは、

にここにこ笑つて、たばこをすつていられました。

「もらったかにかにというのは、どんなかにでしよう。」と、お母さんはいって、あちらから、おじいさんのしよつてきたかにかにを、家のものものいる前に持つてこられました。

見ると、それは、びつくりするほどの、大きい、真つ赤な海がにでありました。

「夜だから、いま食べないで、明日食べましょう。」と、お母さんはいわれました。

「なんとという、大きなかにだ。」と、お父さんもびつくりしていられました。

みんなは、まだ起きるのには早いからといって、床の中に入りました。太郎は、夜が明けてから、かにを食べるのを楽しみにして、そのぶつぶつといぼのさる甲らや、太いはさみなどに気をひかれながら床の中に入りました。

明くる日になると、おじいさんは、疲れてこたつのうちにはいつていられました。太郎は、お母さんやお父さんと、おじいさんの持つて帰られたかにかにを食べようと、茶の間にすわつていました。お父さんは小刀でかにの足を切りました。そして、みんなが堅い皮を破つて、肉を食べようとしますと、そのかには、まったく見かけによらず、中には肉もなんにも入つていず、からっぽになつてゐるやせたかにでありました。

「こんな、かにがあるだろうか？」

お父さんも、お母さんも、顔を見合してたまげています。太郎も不思議でたまりませんでした。

おじいさんは、たいへんに疲れていて、すこしぼけたようにさえ見られたのでした。「いつたい、こんななかがこの近辺の浜で捕れるだろうか？」

お父さんは、考えながらいわれました。

海までは、一里ばかりありました。それで、こんなかにをもらった町へ行って、昨夜のことを聞いてこようとお父さんはいわれました。

太郎は、お父さんにつれられて、海辺の町へ行ってみることにになりました。二人は家から出かけました。

空は、やはり曇っていました。暖かな風が吹いていました。広い野原にさしかかったとき、

「だいが、雪が消えてきた。」と、お父さんはいわれました。

黒い森の姿が、だんだん雪の上に、高くのびてきました。中には坊さんが、黒い法衣をきて立っているような、一本の木立も、遠方に見られました。

やっと、海辺の町へ着いて、魚問屋や、漁師の家へ行って聞いてみましたけれど、

だれも、昨夜、雪の上に火を焚いていたというものを知りませんでした。そして、どこにもそんな大きなかにを売っているところはなかったのです。

「不思議なことがあるればあるものだ。」と、お父さんはいいながら、頭をかしげていられました。

二人は、海辺にきてみたのです。すると波は高く、沖の方は雲切れのした空の色が青く、それに黒雲がうずを巻いていて、ものすごい暴れ模様景色でした。

「また、降りました。早く、帰ろう。」と、お父さんはいわれました。

二人は、急いで、海辺の町を離れると、自分の村をさして帰ったのであります。

その日の夜から、ひどい雨風になりました。二日二晩、暖かな風が吹いて、雨が降りつづいたので、雪はおおかた消えてしまいました。その雨風の後は、いい天気になりました。

春が、とうとうやってきたのです。さびしい、北の国に、春がやってきました。小鳥はどこからともなく飛んできて、こずえに止まってさえずりはじめました。

庭の木立も芽ぐんで、花のつぼみは、日にまし大きくなりました。おじいさんは、やはりこたつにはいつていられました。

「あのじょうぶなおじいさんが、たいそう弱くおなりなされた。」と、家の人々はいい
ました。

ある日、太郎は、野原へいつてみますと、雪の消えた跡に、土筆がすいすいと幾本と
なく頭をのぼしていました。それを見ましたとき、太郎は、いつか雪の夜に、赤いろそ
くの点っていた、不思議な、気味のわるい景色を思い出したのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「婦人公論」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「大《おお》きなかに」となっています。

※初出時の表題は「大きな蟹」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大きなかに

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>